

堺市金岡地区でのエリアマネジメントと コミュニティ営農に向けた取り組み

大阪府立大学大学院生命環境科学研究科・教授 加我 宏之



はじめに

大阪府堺市北区の金岡地区では、都市の農空間保全を目的に農家や地域住民とともにまちづくり活動が行われている。中堅農家を中心に住民発意ではじまったまちづくり活動は16年間の長きにわたり継続してきた。地域住民を対象とした農業体験イベント、地域の自力による農道整備「みち普請」など、農家だけでなく地域住民を巻き込んだまちづくり活動は、2007年度に豊かなむらづくり全国表彰事業で農林水産大臣賞を受賞するなど高く評価されている。

金岡地区は2017年度に国が公募した「都市と緑・農が共生するまちづくりに関する調査」に採択され、まちづくり活動を通じて展開されてきたエリアマネジメントの取り組みの効果を検証し、次世代が「業」として都市農業に取り組むためのコミュニティ営農の可能性について検討がなされた。本稿では、本実証調査の成果の一部を報告する。

1. 金岡まちづくり活動の概要

金岡地区は大阪府堺市北区に位置し、北東部の市街化区域と市街化調整区域の境界線上に位置する古くから続く約150haの農村集落である。地区の北部には大阪中央環状線、南部には南海電鉄高野線、西部には大阪市営地下鉄御堂筋線と都市計画道路常磐浜寺線、地区の中央部を東西方向に旧の竹之内街道、地区の中央部を南北方向に我堂金岡線や金岡引野線が通るなど、交通至便な地区である。本地区には農地とため池から構成される約50haの農空間がまとまって位置し、今も地域固有の田園景観が残されている。市街化調整区域内に分布する農地は、農業振興地域の指定を受けておらず、2002年に堺市では都市計画法第34条11項に関する条例が施行（2012年廃止）され、市街化調整区域内の市街地開発が緩和されたこともあり、線引きの境界線に近い農地の宅地化が進んだ。2015年には地区の中央部を南北に貫

く都市計画道路南花田鳳西町線が事業認可されたことで、依然強い都市庄を受けている（図-1）。

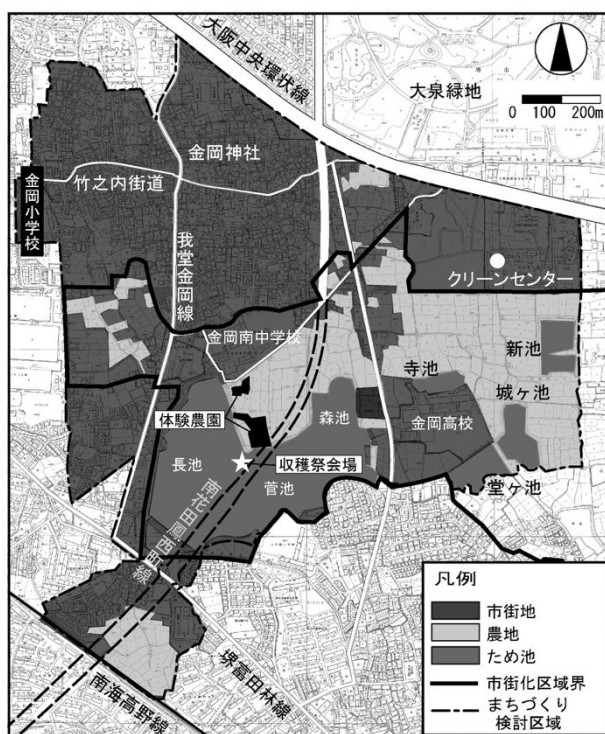


図-1 金岡地区の現況

このような状況を受け、金岡地区では2000年3月に大阪府のため池改修事業である『金岡地区地域オアシス整備事業』の事業採択を契機とし、40才前後の若手農家数名が中心となり、10年後、20年後の金岡地区の将来像を考えるために『金岡まちづくりの会』を結成したことをきっかけにまちづくり活動が始まる。2001年11月に農空間の将来構想策定のための母体となる『金岡まちづくり推進協議会』が結成され、2015年の都市計画道路の事業認可を契機に『金岡地区農環境像活用検討会（以下、検討会）』へと発展し、現在も活動が継続してなされている。検討会には、地域の組織から菅池・森池水利組合、堂ヶ池・寺池水利組合、長池水利組合の3水利組合等と金岡まちづくりの会を母体として、堺市の農政

部局や都市計画部局といった行政組織に加え、(一財)都市農地活用支援センターが加わるとともに大学との連携で民間の経営コンサルタント、さらに農業プラントに関わる民間協力会社も参画し、産・官・学・民が一体で推進していく体制が構築されている(図-2)。

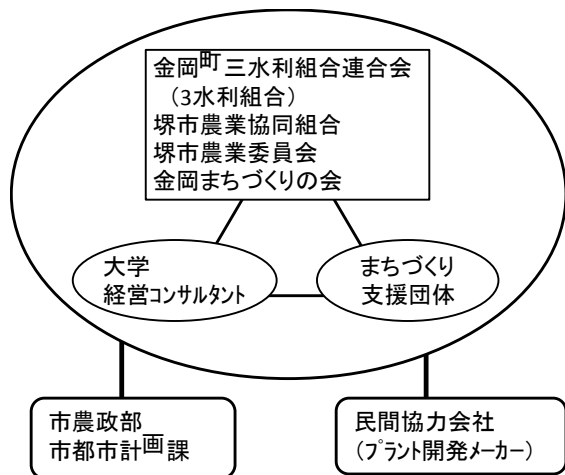


図-2 金岡地区農環境活用像検討会の組織体制

本地区でのまちづくり活動は、開始以来、地区の現状を認識するための土地利用調査や農家・非農家・中学生に対するアンケート調査、まちづくり理念や将来像の討議に加え、中学生によるコスモス定植や地域の小中学生や子ども達を対象とした田植え、稲刈り体験、豚汁や新米を振る舞う収穫祭など、地域住民を対象とした農業体験イベントが活発に行われてきた(本稿写真【農業体験イベントの様子】)。農業体験イベントは、2002年より開始され2016年までの計15回、15年間にわたり毎年開催されてきた。秋に行われる収穫祭は、初年度より参加人数が年々増加し、近年では延べ1,000人以上が参加している。なお、本地区のまちづくり活動の発展プロセスについては既往報告^{1)・2)}に詳しい。参照されたい。

2. まちづくり活動を通じたエリアマネジメントの効果

金岡まちづくりの会は、地域住民を対象とした農業体験イベントの目的として、①農作業体験及び自分たちで育てた作物を味わう体験を通じて、地域及び地域で営まれている農業に対する理解度及び好意度を高めること、②農業に対する好意度を上げることで将来の農業の担い手の確保や農空間保全につなげること、③まちづくり活動の担い手確保に向けた地域の潜在性を高めることを掲げ、継続して実施してきた。

金岡まちづくりの会は、まちづくり活動の初動期に各種の農業体験イベントを実施する前の2002年に中学生、地域住民を対象にアンケート調査を実施し、農地・農業に対する現状の認識と今後の土地利用意向を探っている³⁾。本実証調査では、16年間のまちづくり活動や農業体験イベントの効果を検証するために再度、中学生や地域住民に対してアンケート調査を実施し、過去の調査結果との比較を通じてまちづくり活動の効果を検証した⁴⁾。

地域住民では、地域行事としての農業体験への参加が増加傾向にあること、緑の豊かさを感じるなど農地の多面的機能の評価が向上し、趣味程度に農作業をすることも45.1%から65.4%に増加している。さらに、地区全体の土地利用として農業的土地利用が望ましいとする意向が増加している。中学生では、地域住民と同様に学校の授業や地域行事での農業体験が5割から9割程度に増加し、農業との触れ合いが深まっていること、農地やため池などの自然環境が豊富といった校区の環境に対する評価は37.9%から48.0%に高まり、農地として効率を上げた土地利用に対する認識も6.9%から20.5%に増加している(図-3)。

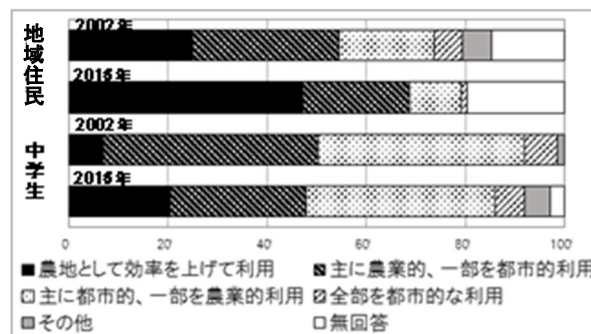


図-3 地区の土地利用意向 (地域住民、中学生)

農作業をすることへの意欲は全体的には大きく変化していないものの、是非やりたいと回答した中学生が約40名存在していることを確認できた。さらに、中学生の約4割が「自然環境の大切さを実感した」、「農業の大切さを実感した」と回答し、中学生の約3割は農業体験を通じて、楽しいだけでなく「農業の難しさ」への理解も深まったと回答し、約2割の中学生が農業や野菜に興味を持ったと回答している(図-4)。地域住民と中学生は各種の農業体験イベント等への参加を通じて農業に対する理解を深め、農空間保全の意識が高まっているといったまちづくり活動を通じたエリアマネジメントの取り組みの効果を実感できた。

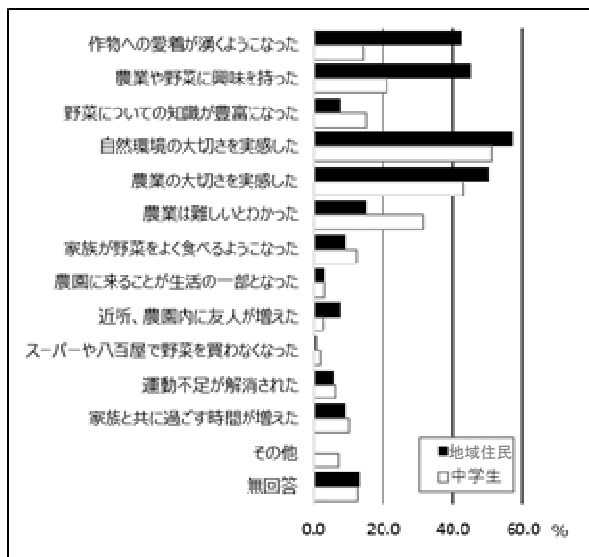


図-4 日常生活での農業に対する考え方の変化 (地域住民、中学生)

一方で、まちづくり活動への参加意向では、地域住民では参加したいとする意向は増加しているものの中学生では若干減少傾向にある。豊かな農空間を次世代に残していくためには、金岡まちづくりの会のメンバーだけでなく、農家や地域住民、そして中学生をはじめとする子どもたちとともに活動を継続していくことが求められる。金岡まちづくりの会の検討や活動内容については、行事案内のポスターや講演会、アンケート調査を通じて情報発信してきた。また、行政のホームページやミニコミ紙等で取り上げられ紹介され、行事の参加者が自身のブログで紹介することも少なくない。しかし、いずれも偶発的かつ一方的なものがほとんどであり、双方向かつ自発的な情報発信が少ないことが課題であった。地域のことを考えて行動する意識“地愛”を高めるために、手軽でかつ広範囲に双方向の情報発信ができる Facebook 等の SNS を活用した情報発信の重要性が指摘された。今後は、SNS 等の情報発信ツールに興味を示した新たなメンバーの参画も確認できたことから、SNS 等を活用して、積極的に情報発信をしていくことで地域住民のチェンジマネジメントを促進し、エリアマネジメントの担い手の拡充を図っていくことが目指された。

3. コミュニティ営農に向けた取り組みの検討

金岡町は堺市、大阪府と同様、販売農家数は減少するものの、経営耕地面積の減少率が1割弱に抑えられ、若手の農業就業人口も増加傾向にある。地区の市街化調整区域では1割強が市街化したものの農地は8割強が保全され、うち7割強は水田として継

続されている。2004年に実施された農家に対するアンケート調査と本実証調査で実施した2016年の農家に対するアンケート調査結果を比較すると、世帯代表は農地の貸与や作業委託が増加し、作業委託等によって農地を維持する意向は継続している。一方、次世代は納税の関係から義務的に農業を行う者が25.4%から41.3%に増加(図-5)し、本格的に農業をやってみたい者が15.9%から1.6%に減少し、農空間保全に対する意識は低下傾向にある。世帯代表、次世代共に地区の農空間保全のための全体調整の必要性に対する意識が低下しているものの、良好な農環境を守るための調整役としては地域の団体に期待されている。

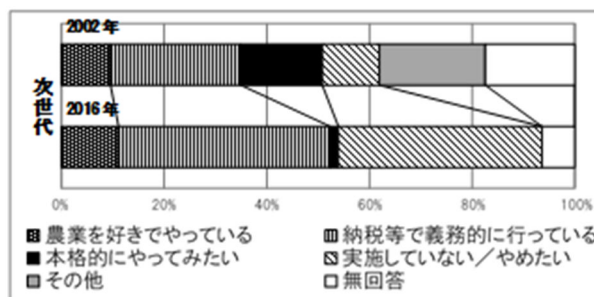


図-5 農業との関わり方 (次世代)

長年に渡るまちづくり活動では地域啓発のための各種の農業体験イベントが継続的に展開されたことに加えまちづくり理念や土地利用ビジョン、社会実験などのまちづくり活動を継続してきたため、農家同士の信頼関係が構築され、農地の貸与や作業委託も含め水田を中心に現時点ではまとまった農空間が保全されてきた。一方で、次世代の農業従事に対する意欲は大きく低下しており、都市庄の高い市街地縁辺部での農空間保全の今後の困難さが課題として確認された。

金岡まちづくりの会の主要メンバーで畑作農業に従事する農家と作業受託を中心に水田農業に従事する農家の兄弟に対するヒアリングより、金岡地区での今後の農業に対する思いを共有した。若手農家を育てたい、子どもに本物の味を知ってほしい、育ててくれた地域に恩返しをしたい、跡継ぎが安心して農業ができる環境を整えたい、子どもに共存の価値を知ってほしい、農業を儲かるようにしたい、楽しみながらといった農業に対する思いをメンバーで共有した。今後の都市農業は「感じる農業」と「儲かる農業」の両輪で「子どもに魅せる農業」を実現するための方策について議論がなされた。「感じる農業」として、田植えや稲刈り等の農業体験、自分で育て

た作物を食べるについては、エリアマネジメントを通じたまちづくり活動の一環として継続的に実施してきた農業体験イベントが一定の効果を発揮している。今後、さらに「感じる農業」を展開するために、農の伝統文化を子どもたちに伝える地域のシニアとの交流プログラム、自らが育てたお米や野菜を料理する子どもレストラン、農業を通じた訪日外国人との国際交流プログラム、農業経営塾などの新たなプログラムの提案が活発になされた。しかし、本地区の次なる課題は、農家の次世代、また、中学生等の次代を担う世代に「儲かる農業」を魅せることである。一定の広がりを持った農空間保全において水田農業の役割は大きい。大面積の水田を少人数で効率よく農業を展開するために、既存の水田耕作オペレーターを中心にIoT技術の活用等で効率化を図り、若年者の新たな雇用を産み出す仕組みの検討が提案された。さらに、高度に管理され、IT化された最先端農業を魅せることで次世代に農業の魅力を伝えたい。そのためには、水田農業に変わる最先端技術を導入した施設園芸の取り組みが検討され、クリーンセンターに隣接する立地条件を生かした新たな農業展開が模索された。一方で、クリーンセンターでも電気、熱、CO₂といった副産物の周辺地域への還元の見込みがなされている。双方のWin-Winの関係を実現し、クリーンセンターの副産物を受け入れるためには、個々の農家の努力による従来の農業形態から農業の担い手を個人から組織に転換する新たな都市型集落営農組織ーコミュニティ営農組織の設立の必要性が示された。

地元農家の知識やノウハウを生かしたトマト栽培にはじまり、すでに多くの地域で取り組まれているイチゴやマンゴー、イチジク栽培、さらには地域住民の誇りや新たな名物となり得る作物として台湾の釈迦頭やカカオ、コーヒーなど、将来の6次産業化も見据え、市街地に新しい商品、サービスを提供し、

【 農業体験イベントの様子 】



田植え



稲刈り



収穫祭



コスモス定植

地域経済の活性化を図るための作物の作付けに夢を抱き、コミュニティ営農の実現に向けて、法人組織のあり方、事業の成立性の検討に取り掛かっている。

おわりに

堺市北区金岡地区では、2000年3月に金岡まちづくりの会が発足し、2003年にまちづくりの理念を提言している。まちづくりの理念は、①豊富な地域住民の個性・能力を集め、活かし、みんなで地域の運営をしていこう、②地域の宝物を守り、町の個性を磨き続けよう、③農地を整えつつ、暮らしを支える都市的な利用に答えよう。④次世代を担う子どもを地域の人材と環境を活かして、育てよう、⑤時代の変化やニーズに対応できる仕組みを作ろうとし、この理念に基づいて有能な人材が集う金岡まちづくりの会が地域をリードして農業体験イベント等のまちづくり活動を展開し、エリアマネジメントに取り組みされてきた。都市農業を取り巻く都市住民の農に対する理解の醸成、農空間が発揮する多面的機能の評価においては、目覚ましい効果を発揮しつつある。今後は、農家の個人の「業」としての農業のみならず、地域の「業」としての農業の魅力を高めるため、新たなステージに進むことが求められる。地域で老若男女が生涯を通じて働き続けられる都市農業の展開によって、地域を見守る人、“地愛”を育み、金岡まちづくりの理念と守ってきた農空間を次世代に引き継ぐため、次世代への投資としてのコミュニティ営農の実現が期待されている。

参考文献

- 1)柳川豪・加我宏之・下村泰彦・増田昇(2006), 堺市金岡町における住民発意型まちづくり活動の発展プロセスに関する研究, 日本造園学会誌ランドスケープ研究, Vol.69(5), 751-756.
- 2)増田昇(2016), 都市農地とまちづくりの今後の可能性: 特集ー都市農地とまちづくり, 区画整理, 2017年2月号, 13-18
- 3)柳川豪・加我宏之・下村泰彦・増田昇(2005), 堺市金岡地区における農空間保全に向けた各主体の土地利用意向に関する事例研究, 日本造園学会誌ランドスケープ研究, Vol.68(5), 751-756
- 4)松浦由布子(2017), まちづくり活動と農空間保全との関わりに関する研究ー堺市金岡地区を事例として, 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科修士論文